

【片輪車】かたわぐるま

夏目漱石の小説『虞美人草』17には失意のうちに世を去った藤尾の亡がらの様子が詳しく描かれています。

「藤尾は北を枕に寐る。薄く掛けた友禅の小夜着には片輪車を、浮世らしからぬ恰好に、染め抜いた。上には半分程色づいた葛が一面に這ひかゝる。淋しき模様である。」

さらに小説は、亡がらを安置した部屋には赤・紫の虞美人草(ひなげし)を描いた酒井抱一筆の銀地屏風が逆さに立てられていたことを記しています。

この場面には興味深い設えが数多く見られます。

北枕が忌を表すことは周知のとおりです。遺体の前に屏風を逆さに立てることも同様の意味があり、近年まで各地で行われていたようです。

小説に記述はなくとも、亡がらの衣服は当然左衽であったことでしょう。

なぜ屏風は金地ではなく銀地なのか。銀地屏風の忌としての意味について既に論じた研究がありますのでご紹介しておきます。(玉蟲敏子『酒井抱一筆 夏秋草図屏風―追憶の銀色』平凡社)

更に私はもうひとつ気になる点があります。なぜ小夜着(袖や襟のついた布団)の文様が片輪車・葛なのか、漱石は片輪車に何を語らせようとしたのでしょうか。

蒔絵棗などでお馴染みの流水片輪車文様は、牛車の車輪(木製)の乾燥によるひび割れを防ぐため、車輪を外し川の浅瀬に浸けた光景を意匠化したものです。

いにしへの都人ならば鴨川で目にしていたはずです。

東京国立博物館蔵国宝〈片輪車螺鈿蒔絵手箱〉はこの意匠の白眉といえましょう。

http://www.tnm.go.jp/jp/servlet/Con?&pageId=E16&processId=01&col_id=H4282&img_id=C0036905&ref=&Q1=&Q2=&Q3=&Q4=&Q5=&F1=&F2=

この箱は寸法から経典を納める箱であったようで、片輪車にはそれなりの意味があるものと思われます。

仏教美術において車輪は仏像表現以前、すなわち人の形でブツダを表すようになる1世紀後半以前から見られる重要なモチーフです。

車の形をした法輪はブツダの説法を意味するのです。説法の口調を滑らかな車の回転に譬えたとも、ブツダの教えの前進・永遠を表わすとも、あるいは煩惱を打破する意味から古代インドの武器(手裏剣)を意匠したともいわれています。

〈片輪車螺鈿蒔絵手箱〉は片輪車を法輪に見立て、経箱に施したという説は納得させられます。他に流水を重視して、車を浄土の花である蓮の花に見立てたとする説もあります。

この手箱の造られた12世紀・平安時代後期は日本の風土に適った国風文化の円熟期に当たります。鴨川の風景を写したやまと絵的な意匠は時代感覚に即しているといえましょう。

先の漱石の小説に登場する小夜着の模様も片輪車を法輪、あるいは蓮の花に見立て亡がらに掛けたのではないかと思えてなりません。

片輪車は特定の季節を限定する意匠なのでしょうか。お茶人にとって重要なことなのですが、手元の史料では、鴨川に車を浸けた季節を限定するまでには至りませんでした。今のところ特定の季節に限るものではないように思います。

流水の涼を採って夏、漱石のように仏事にかけてお盆、牛車といえば葵祭を連想しますので初夏、蓮華の意味から吉祥紋として慶事に使うのもよいかもかもしれません。

片輪車の取り合わせに何か面白いアイデアがありましたら教えてください。

その他〈久能寺経〉の見返には「春雨はこのもかのもの草も木もわかず緑に染むるなりけり」の歌を絵画化した流水を伴わない片輪車が描かれています。葦手という仮名の隠し文字とともに紹介したいのですが〈久能寺経〉の画像が見つからず叶いません。残念です。

<http://www.morita-fumiyasu.com/>

~ Copyright (C) 2011 ~私の書齋~ 森田文康. All Rights Reserved.~